

2024.03.14 卒業式式辞

例年以上に不順な天候が続いた今年の冬でしたが、3月も半ばになり、今日は穏やかな日差しが降り注いでいます。

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。ご列席下さったご家族、保護者の皆様、本日はまことにおめでとうございます。本日こうして皆様と卒業生の門出をお祝いできることをほんとうに嬉しく思います。

みなさんが本校に入学したのは平成も終わりに近づいた平成 30 年、2018 年でした。この年は、韓国の平昌で開かれた冬季オリンピックで日本が史上最多のメダルを獲得したことや、その一方で、夏には平成最悪の被害となった西日本豪雨などのニュースが、国内を駆け巡った年でした。あの年から6年の歳月をみなさんはこの神奈川学園で過ごしてきました。

今回私は、みなさんが登校日に書いてくれた、6年間を振り返った文章を読ませてもらいました。そのうちの何人かの文章を引用させてもらいながら、みなさんの6年間を振り返りたいと思います。

みなさんの中には6年前の入学式の言葉を胸にがんばってきた人もいます。まずはその方の文を紹介しましょう。

——私は、神奈川学園に入り、入学式で「皆さんが自立した女性になれるよう、6年間お手伝いをしていきます」という言葉を聞いたときから、自分の苦手なことを克服して少しでも入学当初より成長した姿で卒業出来るように頑張ろうと心に決めていました。……私は、球技大会、文化祭などその他のイベントも含め、学校の行事がすごく好きでした。行事自体が楽しいものとなっていたし、クラスのみんなども仲を深められる機会だったので貴重な時間でした。

この方は6年前の言葉を胸に刻みながら歩みつけ、自身の大きな成長につなげたことと思います。

もう一人の人の感想です。

——私はこの神奈川学園で過ごした6年間が本当に楽しかったです。中学受験をして、知り合いはごくわずかしかなかったものの、中1のガイダンス期間に学校探検をして、KGについても、友達についても多くのことを知る機会となりました。PA研修では楽しく自然とふれあい、横浜に住んでいるとなかなか体験できないことだったので6年弱たった今でも印象に残っています。中2のときには小網代の森へ行き、PA研修とは違い、小網代の森にいる生物等について学ぶことができました。中3のときはコロナウイルスの影響で音楽会は開催されませんでした。中1、中2のときにクラスメイトとより良い歌声を届けようと一生懸命になったのでその歌は今でも歌えます。

多くの人にとって、順調にスタートした学園生活でしたが、それが大きく変わったのが、今の方の感想にもあった、新型コロナウイルスの大流行です。感想の中では、コロナの頃の生活を振り返りながらも、制限のある中でがんばったことを記してくれている人も多くいました。

——この6年間を通して、色々なことを学び、理解を深める事ができました。途中コロナウイルスの影響で行事が無くなってしまったり、縮小されてしまったけれど、校外学習、FWや海外研修、文化祭などを通して、色々なところに行き、そこで多くの人に会い、自分の知らなかった世界や、新たな興味関心を見つけることができました。本や映像だけで見るとは違って、実際に現場に行ってみることで感じられるものや、得られた学びがありました。

彼女はコロナでさまざまな変更が生じる中でも、6年間の学び、それも実際に体験する学びのなかで多くのことを得てきたと振り返っています。

ところで。

今、社会を見ると新型コロナウイルスの状況は落ち着いている一方で、世界全体が落ち着いたとはとても言えない状況です。2年前に始まったウクライナとロシアの戦争は終わらず、去年はさらにハマスの攻撃をきっかけに、イスラエルによるガザへの侵攻が始まってしまいました。

思えば神奈川学園創立の1914年は、第一次世界大戦が始まった年でした。本校は今年で110周年の歩みを数えますが、この間、人間は地球上のどこかで戦争や紛争をしつづけてきました。このような絶え間ない争いの歴史を振り返ると、人間は何も学んでいないのではないだろうかと暗鬱たる気持ちになることもあります。

もちろん、社会がまったく歩みを止めてしまっているわけではありません。110年前といえば、例えば、選挙——つまり政治に参加できる人は、限られたごく一部の人でした。現在、選挙権は一部の人のものでなくなりました。また、たいへんゆっくりとした歩みではありますが、長いスパンで見ると少しずつ女性の社会進出は進んでいますし、昨今のLGBTQへの注目などは、従来軽視されていたり、社会的に明確には認知されていなかったことへの認識が深まっている証左だと思います。不十分ながらも、社会は確実に進んでいる面もあります。

これからもさらに社会は歩みを進めていくでしょう。その社会を創っていくのはみなさんです。

みなさんにどんな社会の担い手になってほしいか、一人の人の感想をもとに、メッセージを贈ろうと思います。

——私にとってこの6年間は毎日が宝物のような時間でした。

神奈川学園に入学してから入学前に比べて自分自身の物事の考え方や捉え方が大きく変わったなと思いますし、成長したなと実感します。特に部活動に所属したことが1番の成長のきっかけだったと思います。……部活動を通して人一倍頑張ることが周りの人にもいい影響を与え、何事も諦めない気持ちこそがこれからの私自身の人生を大きく左右するものになるんだなと気づけました。また、成長するために周りの環境は少なからず影響してくると思います。私は神奈川学園に入学して環境に恵まれたなと心の底から思います。私が悲しかったことや嬉しかったことを報告したら自分の事のように同情してくれたり喜んだりしてくれる友達想いな友人や親身になって相談に乗ってくれる先生方が沢山います。そんな存在にいつも助けられて自信がつき、自分らしくいいんだと思えるようになれました。そう思わせてくれた神奈川学園を誇りに、これから先、社会で活躍していきたいなと思います。

彼女は周囲の人と与え合うよい影響の中で、自分らしくいいと思えるようになったと書いています。お互いに良い影響を与え合う関係性については、他の人も記していました。私はこうした文章を読みながらある本の一節を思い出していました。その本は齋藤陽道さんという写真家が記したエッセイです。彼とパートナーの女性は聾者——聴覚に障害をもっている方ですね——である一方、お子さんは聴覚に障害をもっていません。そのような身体的違い、あるいは内面的違いから、彼はさまざまな発見をしているのですが、それをまとめたのが『よっちぼっち』というフォトエッセイです。そこでこんなふうに書いています。

——「ぼく」という存在は、「ぼく」だけの感覚でできているのではなかった。(略) 出会ってきた者たちのカケラが積み重ねられた結果が「ぼく」だった。(略)

異なる身体を持ち、異なる考え方をする「あなた」の表情や、動作、ことば、そんな何かしらのカケラを自分に宿らせる。逆に、相手に宿った「ぼく」のカケラを見出したりする。その繰り返しによって、一人では生きられない自分の弱さを知ってゆき、他者に共感したり、協力したり、互いを尊重したりすることに喜びを感じるようになっていくのだろう。

年齢、性別、障害……。異なる身体の人と付き合うには、自分の「あたりまえ」を一旦ほどいて脇に置かなければならない。

「あたりまえ」は、言い換えると「私がそう感じるんだから、あなたも同じように感じているでしょう」という、想像力を欠いた「断定」だ。

他者の苦しみや悲しみを想像することのない断定はいつも簡単に、違う感覚を持つ存在を否定する「差別」につながっていく。

自分の「あたりまえ」に執着しない。その大切さをより教えてくれたのは、なんばさん(この方は筆者の友人です)であり、子どもたちであり、あまたのカケラを授かった異なる他者たちであった。――

みなさんは、神奈川学園で多くの「他者」と出会ってきました。その中で、相手に共感したり、共感してもらったり、協力しあったり、尊重しあったりする経験を重ね、自分の価値観や感性をより豊かに、あるいは新たに書き換えたりしてきたと思います。そんな自分自身への、そして他者への眼差しが、これからの社会には必要なのだと思います。自分を大切にしながらも、自分の「あたりまえ」にこだわりすぎず、他者の感覚を尊重できる。そんな優しく豊かな社会を、神奈川学園で6年間を過ごしたみなさんはきっと築いていけると信じています。

そして、最後に。

神奈川学園は、みなさんが帰りたいと思ったときにいつでも帰ることのできる、「心のふるさと」であり続けます。みなさんが帰ってきてくれることをいつでもお待ちしております。

本日はご卒業、おめでとうございます。

以上をもちまして式辞といたします。